

エルサレムに迎えられる

聖書 マタイによる福音書 21章 1～11節 讃美歌 328 83

説教 森田幸男牧師

私たちは先の日曜日に復活節のお祝いをしたばかりであります。ですから今日ご一緒にお読みするところは、それに逆行することになります。けれどもマタイによる福音書を前から順序に従って読んで来ましたので、今日はここをご一緒に読みたく思います。

ここはイエス様がエルサレムに子ろばに乗って入って行かれることが書かれてありますので、いわゆる受難週、キリストが十字架にかけられて殺されるその週の日曜日のこととなります。今読みましたように人々は主イエス・キリストのエルサレム入城を「ホサナ、ホサナ」と歓呼して迎えているのであります。この「ホサナ」というのはイエス様の国の言葉で、「どうか救ってください」とか、「今、救ってください」という意味の言葉ですが、これがだんだんと歓呼の叫びとなり、王様を迎えたりする時に「万歳、万歳」というのと同じ仕方でも用いられるようにもなりましたけれども、「ホサナ」の元来の意味は、「どうか救ってください」ということでもあります。

そして8節を見ますと、「大勢の群衆が自分の服をぬいで道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた」とあります。この「木の枝」は「しゅろの葉」のことです。自分の服をぬいで道に敷くとか、木の枝を切って道に敷くという描写は、これは旧約聖書を読みますと、王に対する民衆の対応の姿であります。今このマタイによる福音書はイエス・キリストのエルサレム入城の姿に、神から遣わされた救い主の到来を見ているのであります。「神の救いの実現」をこのイエス様の姿の中に見ているわけでありませう。

そしてこの福音書の記者は、今、実現をみているところの救いの約束が聖書のどこに記されているか、どこにその預言があるかということ調べるわけでありませう。今読んだ4節に、「それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった」とあります。そしてこのマタイによる福音書は5節と10節のところに、行を変えてかぎ括弧をつけての言葉が記されております。今日のところを読むだけでも、いろんな旧約聖書が背景にあることは言えるわけですが、特に今、イエス・キリストの子ろばに乗ってのエルサレム入城の中に、神の救いの計画が実現されつつあるということ記すところで、旧約聖書の二つの箇所が特に引用されていると言ってよいと思います。5節は旧約聖書の後ろから二番目に「ゼカリア書」というのがありますが、その9章の9節10節、それは全体としては“諸国民の裁きとイスラエルの救い”という見出しの付いた項の中に出てくるのですが、そこにこのようにあります。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者

高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って。

わたしはエフライムから戦車を エルサレムから軍馬を絶つ。

戦いの弓は絶たれ 諸国の民に平和が告げられる。

彼の支配は海から海へ 大河から地の果てにまで及ぶ。」

キリストは軍馬にまたがって凱旋將軍のようにではなくて、ろばに乗って、しかも子ろばに乗って入城される。軍馬は戦いの時のものでありますが、ろばは平和時の乗り物です。そういうわけでキリストは、高ぶることなく、力を誇示することなく、子ろばに乗ってエルサレムに入られて軍馬を絶ち、戦いの弓を絶って平和を実現される。そしてその支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ。このようにゼカリア書に書かれてあったその預言が、今キリストの姿の中に実現していると、この福音書の記者は見ているわけです。

もう一つ、9節の方は旧約聖書詩篇の118篇からの引用であります。この118篇という詩篇はとても大事な、新約聖書がイエス様の姿を描く時に、背景にある詩篇ですが、22節から読んでみます。

22節 「家を建てる者の退けた石が 隅の親石となった。

(これは新約聖書にもしばしば引用されるイエス様のことを指しています。)

23節 これは主の御業 わたしたちの目には驚くべきこと。

(イエス様の十字架の死と復活のことを思わせる表現です。)

24節 今日こそ主の御業の日 今日を喜び祝い、喜び踊ろう。

25節 どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。

26節 祝福あれ、主の御名によって来る人に。

わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。」

この25節26節が今日のマタイによる福音書の9節に引用されている詩篇118篇です。

「どうか、わたしたちに救いを」というのがヘブル語では「ホサナ」という言葉です。

この詩篇118篇については折々触れて来ましたが、この118篇をイエス様と弟子たちがあの最後の晩餐のあと、歌いながらゲッセマネの園に赴いたのです。最後にイエス様が弟子たちと一緒に歌われた讚美歌がこの118篇でありました。そして、今日の箇所も過越祭の最中ですが、その祭りの食事の中で皆が歌った詩篇が113篇から118篇とされています。それをここに引用しているのです。ですからこういう引用の仕方の中に、マタイによる福音書の記者は、イエス様の中にモーセの再来を見ていると言うことができようかと思えます。このようなわけで人々はイエス・キリストを今、「ホサナ、ホサナ」と大歓迎しているわけにあります。

エルサレムは確かに古い都ですが、今日の人口感覚からすると当時はそんなに人口の多い町ではなかったのですが、過越祭の時にはどれだけの羊がほふられて犠牲として捧げられたかということについての記録によれば25万匹という数字があるそうです。大体一匹の羊で一家族、食べられない時は隣の家族と一緒にということですから、一匹で十人と計算すれば、25万匹の羊がほふられたということは十倍すると250万という数字になります。これは大変な数字です。ですからこの時のエルサレムの状態は大変なものであったと想像することができます。そして人々は、イエス様を「ホサナ、ホサ

ナ」と叫んで迎えているわけであります。「どうか今私たちを救ってください。あなたこそメシアです。救い主です。王様です」と。

「ダビデの子」というのはメシアを表現する言葉です。ダビデは昔の王様です。そのダビデのような王という意味で「ダビデの子」と言って、叫んでいるのです。この時点では分からないことですが、私たちは既に聖書を読んでおりますし、復活節も祝ったわけでありますから、人々はこのようにイエス様を迎えましたが、この後どういう経過をたどったかということをお達は知っております。これは日曜日、週の初めの日の事でありましたけれども、数日後の金曜日には今度は同じ群衆が、イエス様を「十字架につけよ。十字架につけよ」と叫んだということが聖書に記されています。この豹変ぶりを見るときに、私たちは大多数の人々がどう考え、どう行動するかということの危うさということをつくづく思い知らされる気がいたします。圧倒的多数の人が、「この人はメシアだ。救い主だ」と言っているのに、数日もすれば、「十字架につけて殺してしまえ」と、こういうふうにならざる評価になってしまうわけであります。そういうことを思いますと、先ほど読みましたゼカリヤ書9章にこうありました。「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る。」つまり、本当に神に従うということだけが、ゆるぎない確かさを持つのです。歓呼が十字架に変わっても、その十字架を越えて、神の善き意思というものが実現していく。そういうことをつくづくと思知らされるのであります。

今日の箇所を読みながらいろんなことを思うのでありますが、この聖書のキリスト教の特徴というのは、いったい何であるか。それは神の言葉、神の約束を信じるところにキリスト教の特質があると思います。それは今日の箇所を見るとよく分かると思うのです。イエス様のことを思う時に、このことが起こるについてはどういう神の約束、預言があったかということで、ゼカリヤ書と詩篇をここに特に引いているわけです。その他イザヤ書等も視野に入れながらここに引かれているわけです。ですから今日の箇所でも分かることは、神の言葉、神の約束、その預言は必ず実現するということです。そういう信仰であります。何故そうかということ、そのように語り、約束する神は誠実な方、真実な方であるからです。その方が語られた言葉、約束は必ず実現する。そういうことですから、神を信じる者は、神の言葉と約束を信じるのであります。そして約束が実現するのは将来のことです。けれども神を信じる者は、それが必ず実現するということを感じて疑わないのです。しかも私たちが心に想像し思い描くよりもはるかに勝って神はその御計画、御心を良く実現してくださる。そしてそれを見せてくださるということを感じるのであります。

ですから、十二弟子の一人のトマスが、他の弟子たちに復活のキリストが現れて、「わたしたちはキリストが復活なさったのを見た」と言っても、その場にトマスはいませんでしたから、「そんな馬鹿なことはない」と彼は言いました。「自分はそんなことは信じない。本当にそれがキリストならば、十字架につけられたその釘跡に自分の指を差し込んで、槍で突かれたわき腹の傷痕に自分の手を差し込んで確かめたら、それがキリストだということを感じる」と言って、仲間の言うことも彼は信じませんでしたけれども、

その時イエス様はそのトマスにも現れて、「あなたの手を、指を、私の傷跡に差し入れてごらん下さい」と言われ、そしてその後、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。見ないで信じる人は幸いです」とこのように言われたとヨハネによる福音書は記しておりますけれども、神を信じる、その言葉を信じる者は、見ないで信じるのですね。正にそれが希望をもつということです。だからキリスト教の特徴はどのような事態の中でも希望に生きる。パウロも、「その希望を持つということにおいて私たちは救われているのだ」と、そう言います。つまり、望むということにおいて、神の言葉と、神その方と私たちはつながっているということなんですね。だから必ず良い未来がある。絶対にそうだとということでもあります。

先ほど来、「ホサナ」という言葉は慣用的には「万歳、万歳」という言葉として叫ばれましたけれども、元来の意味が大事だと思います。「どうか救ってください。今救ってください」という叫びであります。

私たちは先の日曜日に、今年の復活節のお祝いをいたしました。その時にも私たちはイエス・キリストの言葉をもう一度聞いたのであります。それはキリストが言われた言葉であります。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない」と、主イエス・キリストはおっしゃいました。このキリストを信じる時、「ホサナ」ということがそこで新しい成就に向けて動き出していると言ってよいのではないのでしょうか。

今日は山田正人くんという岡山から出て来た青年と一緒に礼拝をいたしました。寒い中、体を震わせて教会の前に立っていた彼と今一緒に礼拝を守っているのですが、礼拝の前に彼にカップラーメンを食べてもらったのですが、すると彼はこう言ったのです。「生きている感じがする」と。たった一杯のカップラーメンで、彼はそういったのであります。それまで彼は震えて死んでいたのですね。カップラーメン一杯で、「生きている感じがする」と言うのです。ましてや私たちがイエス・キリストを信じるならば、私たちはどんなことによっても崩れることのない新しい命に豊かに生きることができるのではないのでしょうか。実は、私たちはそういう命を今生かされているのです。そのことを覚えて感謝いたしたく思います。

お祈りいたします。

神様。あなたの言葉、あなたの約束、あなたの真実は、常に私たちと共にあって離れることはありません。あなたの慈しみはとこしえに絶えることはありません。そのことを覚え、心から感謝を捧げ、御名を賛美いたします。

導かれて今日共に礼拝を守った山田正人くん、どうかあなたが歩むべき道を切り開いてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前におささげいたします。アーメン